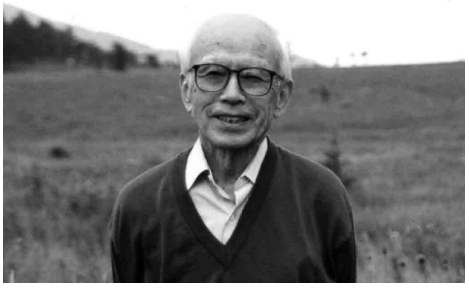
髙田三郎作品による
リヒトクライス第26回演奏会



髙田三郎
（作曲家 *1913-2000*）

リヒトクライス

混声合唱団コーロ・ソフィア／女声合唱団コーロ・コスモス／しおさい／大井しらゆりコーラス／筑波大学混声合唱団

1992年、鈴木茂明の指揮する5団体が髙田三郎作品の精神と芸術性に共鳴して結成。以来、2000年に帰天されるまで毎年作曲者自身の指導を受け、髙田作品の個展としての演奏会を開催し、26回目を迎える。「リヒト」はドイツ語で「光」を、「クライス」は同じく「輪」を意味する。プログラムは混声・女声・男声合唱曲、典礼聖歌、独唱曲、室内楽曲、オルガン曲、ピアノ曲など多岐にわたり、髙田作品の真髄を味わえるとの評価は高い。

光　いのち　みことば

西脇 純（聖グレゴリオの家宗教音楽研究所講師）

「リヒトクライス」は「光源のまわりにできる光の輪、光環、コロナ」という意味だそうです。つまりこの音楽の演奏者はみな「光に照らされている人々」であり、同時に「輝きそのもの」でもあります。演奏者ばかりではありません。「リヒトクライス」の演奏に接すると、聴いているわたしたちの心も照らされる思いがいたします。さらに、この音楽の光が心の奥底までにはまだ届いていない人々、あるいは、将来この音楽に接することになるかもしれない人たちさえも、この輪に連続しているのではないか、そう思われてくるのです。

「リヒトクライス」の光源は何でしょうか？　もっとも近いところに作曲者髙田三郎がいらっしゃることは言うまでもないでしょう。作曲者は闇に光を届けてくださいました。しかし、闇に輝く光そのものは、むしろ作曲者と、その生涯を射抜いた、もっと大きな光だったのではないでしょうか。

キリスト教は光のシンボルを用いて、神について思いを巡らせてきました。その代表格が『ヨハネ福音書』です。ヨハネはプロローグでイエスを「まことの光」「世に来てすべての人を照らす光」（1 章 9 節）と呼んでいます。

しかしよく近づいてみると、その「光」は「いのち」であって、「いのち」は「みことば」のうちにあると書かれているのです。その箇所（1章1～5節）を、髙田三郎作品「混声合唱とピアノのための『ヨハネによる福音』」のテクストから、抜粋して引用しましょう。

初めにみことばがあった。みことばは神とともにあった。みことばは神であった。みことばは初めに神とともにあった。（中略）みことばのうちにはいのちがあり、そのいのちは人の光であった。この光はやみの中に輝いている。（後略）

「リヒトクライス」の奏でる音楽の源はすべて、いわば、このヨハネ的な意味での「みことば」なのではないでしょうか。嘘偽りのない確かなことば。それゆえ聴く者を希望の光で照らし、生の深みと高みへと向かわしめる、いのちのことば。聴く者の内奥にわけへだてなく響き、留まる、ことば。そのような「ことば」に満ちた音楽を、人はどうして歌わずにおられましょう？

「リヒトクライス」のみなさん、どうぞ歌い続けてください。

やみの中に輝く光、いのち、みことばをたたえて。

※未就学児の入場はご遠慮ください。※お花、贈り物はご遠慮ください。